
月下の狩人

野上みこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の狩人

【Nコード】

N9866X

【作者名】

野上みこと

【あらすじ】

世界には通称『闇』という未知の物質が存在した。その闇は人間の感情に反応しその者を異形の怪物 『魔人』へと変える。これはそんな魔人達を狩る魔人 立花葵の物語。

プロローグ

夕火の刻、粘滑なるトーヴ
遙場（はるば）にありて回儀（まわじ）い錐穿（まきり）つ。

総て弱ぼらしきはボロゴウヴ、
かくて郷遠（ちとあ）しラースのうずめき叫ばん。

『我が息子よ、ジャバウオックに用心あれ！
喰らいつく顎（あご）引き掴む鈎爪（かぎづめ）！

ジャブジャブ鳥にも心配るべし、そして努（ゆめ）
燻り狂えるバンダースナッチの傍に寄るべからず！』

ヴオーパルの劍（けん）ぞ手に取りて
尾揃（おそろ）しき物探（ものた）すこと永きに涉れり
憩（やす）う傍らにあるはタムタムの樹、
物想いに耽りて足を休めぬ。

かくて暴（はつ）なる想いに立ち止まりしその折、
両（まなこ）の眼を炯々（けいけい）と燃やしたるジャバウオック、
そよそよとタルジイの森移ろい抜けて、
怒（ど）めきずりつつもそこに迫り来たらん！

一、二！ 一、二！ 貫きて尚も貫く
ヴオーパルの劍（けん）が刻み刈り獲らん！
ジャバウオックからは命を、勇士へは首を。
彼は意気踏々（いきとうとう）たる凱旋のギャロップを踏む。

『さてもジャバウオックの討ち倒されしは真（まこと）なりや？

それは、人間よりも圧倒的上位に君臨しているはずのそいつが、俺という下等なものを見下す目ではなかった。

怒りだ。

こいつは俺を……この世全てのものを憎んでいるんだ。

森羅万象、生きとし生けるものを、怒って、憎んで、呪って、崇つているんだ。

そこに生きているのなら、例え人だろうが、虫けらだろうが、こいつは一欠けらの容赦も無く殺すだろう。

きつと、それこそが、俺がこの怪物をここまで恐怖する真の理由なのだ。

俺は未だかつてここまで憎悪を向けられたことがあっただろうか。いや、ない。だって、普通の生物があそこまで何かを憎んだら、心が壊れてしまふに違いないから。

怪物がこちらに体を向ける。すると、その手から何かが落ち、転がってくる。俺はその真つ黒で丸くて、バレーボール程の大きさのそれを追うように視線を動かす。最初は何だかわからなかった。でも、それが俺の爪先に当たって動きを止めた時、ようやく何かわかる。

「ひッ!？」

それは、かつて父であったものの首だった。

炎に焼かれて黒こげになっているが、顔の作りや残ったパンツ、そして何より、生まれてから今までずっと一緒に暮らし、培ってきた絆がそれを父だと告げていた。

怪物がゆっくりと俺に近づいてくる。大股で、地面を強く踏みしめるように一歩、また一歩とこちらにやってくる。

一瞬、何かに足を取られて怪物の動きが止まった。自らの足元に視線を下げると、緩慢な動作で面倒くさそうにその何かを蹴り飛ばす。放物線を描き、俺の目の前に落下する。それは地面に叩きつけられると、力なく跳ねた。

「か、かあさん……!」

それは、かつて母であつたものだった。

俺は目尻に涙を浮かべながら、母の骸を力強く抱きしめた。

再び、怪物は歩き始める。炎をまたぎ、こちらに迫ってくる。

そこで、とうとう俺の心が折れた。

頭が真つ白になり、辛うじて理性で抑えていた感情が、まるでダムが決壊したかのようにあふれ出す。

「……た、たすけて」

命乞いなんて無駄だ。

そう思つていても、口に出さずにはいられない。

「助けて……。助けて。助けてッ！」

涙と鼻水と涎で顔をぐちゃぐちゃにしながら懇願する。が、怪物は歩みを止めない。

「いやだッ！ 死にたくないッ！ た、たすけ……たすけてえええ！ ひいひいひい！」

体が痺れ、逃げ出すことも出来なくて、母を抱いたまま身を縮める。

気づいたら、怪物は目の前に立っていた。頭を垂れ、俺をじっと見下ろしている。俺は涙を流しながら、祈るように、ただひたすら「たすけて」を繰り返す。

怪物は右腕を振り上げた。俺はもうだめだとばかりに目を瞑る。

誰か……誰か、何でもするから、何でもするから助けてッ！

俺目がけて、怪物の腕が振り下ろされた瞬間

真横から風を切つて飛んできた何かがその腕に当たり、爆発する。いや、腕に当たる直前の空間で爆発したと言つた方が正しい。

その爆発で、怪物の動きが止まる。怪物は首を動かし、何か飛んできた方向に顔を向けた。俺も恐る恐る、同じ方向に視線を向ける。

そこには二人の男女がいた。

一人は背広を着た、二十代後半から三十代前半の狐のような細い目をした軽薄そうな男だ。

そして、もう一人はカーキ色の革製のスーツに身を包み、燃えるように赤い髪を腰まで伸ばした、長身の女。切れ長の目が特徴的な絶世の美女で、トップモデルと言われたらすんなりと納得しそうだ。

最初に二人を目にした時、この人達は願いが天に通じて自分を助けに来てくれた天使のような存在だ、と思った。けど、すぐにそれは大きな勘違いだったと悟る。

女が、こちらを見て笑った。それはこの世のものとは思えない程の妖艶な笑みで、健全な雄ならば誰でも魅了されてしまう程の魔力を帯びていた。

だが、俺の中で芽生えた感情は畏怖だった。背筋がぞくりと冷たくなり、腕には鳥肌が立っている。きつと、その女の表情の裏に隠された狂気を垣間見てしまったから。

女がこちらに近づいてくる。目の前まで来ると、俺を見下ろした。その瞳には何の感情も宿っていない。

「よく生きていたな、少年」

そう言っつて、女は唇の端を吊り上げると、手を差し出してくる。

俺は一瞬躊躇ったが、その手を握った。

今思うと、これは契約だったのだ。決して反故には出来ない、悪魔との契約。

それが、俺の人生を闘争の日々に変えた、魔女との出会いだった。

？

「サッカーやるヤツこの指とまれー！」

一人の少年が人差し指を立ててそう言うと、一人、また一人と他の少年達が集まってくる。

「よし、丁度十人いるから、五対五で戦おうぜ！」

少年達は二つのチームに分かれてサッカーを始めた。

みんな白黒の球を汗を飛び散らせながら必死に追いかける。

僕は庭にある一本の樹の木陰で、そんな少年達を羨望の眼差しで見つめていた。

いつもこうだ。

自然にあの中に混ざればいいのに、それが出来ない。

今よりも幼い頃、みんなの輪の中に混ざろうとしたが、上手く自分の意思を伝えられず、失敗したのが尾を引いているのだろうか。

仕方が無いので、持っていた本を読み始める。

孤独な現実から逃避するために暇な時はいつもこうで、この図書室にある本はもう大体読んでしまったから、この本を読むのはこれで二回目だ。

気づいたら僕はこの孤児院で生活していた。

僕には家族は無く、どうやら天涯孤独の身というやつだった。

職員の人達は暴力など理不尽な扱いをしてくるといったことはない。だけど、愛情を与えてくれるわけでもなかった。ただ仕事として、僕らに接してくる。

学校でもこんな感じだ。

友達もいないし、教師もそんな僕のために進んでなにかをしようとはしない。

別に孤児だからと学校で苛められたりはしないから、辛いと感じることはなかった。けど、授業参観とか運動会とかで他の子供達の親が学校にやってきて仲睦まじい様子を目の当たりにすると、なる

ほど僕は不幸なんだなと実感する。

そんな風に幼少期を過ごし、やがて中学を卒業した。

義務教育が終わると、孤児院から学費は出ない。だから僕は定時制の高校に入学し、バイトで学費を稼いだ。

そこでもやはり、友人はできなかった。

柄の悪い人や、年配の方など、打ち解けるのが難しい人種ばかりだったというのもあるが、やはり、僕には友達を作るといふ能力が欠如しているのだろうと思う。

結局、三年間を勉強とバイトのみで過ごした。

卒業式で同じクラスの人達が感極まって涙を流していたが、僕には何の感慨もなかった。

高校を卒業後、担任教師に薦められるままに決めた自動車整備工場に勤め始める。

そこでは今までと少々勝手が違っていた。

明らかに元ヤンの先輩達に気弱なところを見抜かれたのか、入社してすぐにパシリとして扱われるようになったのだ。

飲み物や食べ物を買に行かされたり、からかわれたり。

けど、別に何も感じなかった。

子供の頃から、ずっと周囲の人達を羨みながらも、傍観し続けてきた。楽しいことも、嬉しいことも、悲しいことも、辛いことも……、いつだって僕の関係ないところで起こっている。

だからそんな現実のことなど、僕には何の関係もない。僕はスクリーンに映し出された白黒の映画を観ている観客で、この人達はその映画の中の登場人物。だから、スクリーンの外にいる僕はいくら罵倒されても何も感じない。なんて風に捉えていた。

ある日のことだ。

いつものように昼食を買いに行かされた。

今日は先輩達のリクエストで、工場の近くにある弁当屋に向かう。初めて行く店。

商店街の一角にあるその店は、テレビで宣伝しているようなチエ

ーン店ではなく、歩道に面したカウンターの奥に小さなキッチンがあるだけのこじんまりとした作りをしていた。

そんな店の中では、白い三角巾を頭に被り、同じく白いマスクで顔を覆い、やはり白いエプロンを身に着けている数名のスタッフが忙しなく弁当を作っている。そして、カウンターでは一人の女の子が接客をしていた。

それなりに人気なようで、何人かの客が並んでいる。僕はその列の最後尾に並んだ。

しばらくすると、僕の番になる。

「いらつしやいませ、ご注文は何になさいますか？」

「えっと……」

僕は先輩達に言われたメニューを思い出しながら店員に目を向けた。

その子は肩まで伸ばしたやや茶色がかった髪がさらさらしていて、頬に少しそばかすがあり、つぶらな瞳が印象的な可愛い子だった。

僕は思わず見とれてしまう。

絶世の美女というわけでもない。雰囲気は暗く、飾り気の無い地味な少女だ。けれど、その素朴な愛らしさと、内から滲み出ている雰囲気が妙に僕の心を掴むのだった。

「……お客様？」

「あ、す、すいません！」

その日から、僕の白黒の映画に僅かに色がついたように感じた。

皿を洗う。

調理師免許のない俺が料理をするわけにもいかず、客足の途絶えない昼時の厨房での仕事はもっぱら皿洗いだ。

カランコロンと店の入り口に付けられた鈴が鳴る。

「葵ちゃん、新しいお客さん来たからお水とメニュー持って行って
！」

「はい！」
急いで水を人数分コップに注ぎ、お盆に乗せる。メニューを二つ脇に挟んで客の元へと向かう。テーブルの横に立つと、コップを置き、メニューを渡す。

「お決まりになりましたらお呼び下さい」
再びカウンターの奥に引っ込んで皿洗いに戻る。

この喫茶店 “アン・ドン・ジュアン” は女性客を狙った店だ。この店のランチセットは安い、美味しい、ヘルシーと女性を引きつけるポイントを押えている。さらに白を基調とした清潔でお洒落な内装のため、女子高生から熟年の奥様まで幅広い年齢層の女性達に人気があるのだ。

皿を洗っていると、カウンターの端に備え付けられているテレビから気になる音声が聞こえてくる。

『……ここ最近世間を騒がせている東京都N区T街の連続殺人事件に新たな犠牲者が出ました』

俺は皿を洗う手を止め、テレビに見入った。

ここ一ヶ月の間、隣街では三件の殺人事件が起こっている。被害者はいずれも十代後半の少年で、遺体はビルの間の路地裏にゴミのように置き去りにされていた。被害者の血液が遺体が発見された場所の壁や地面に大量に付着していたことから、犯人は生きたまま被害者を現場に連れてきて殺害 そのまま逃走したと思われる。

『……遺体はこれまでの被害者同様、両手足を潰され、胸を刺された状態で発見されました』

テレビでは遺体はただ“両手足を潰され、胸を刺された状態”としか報道されていないが、実際にはその他にも特筆すべき点がある。だが、それはあまりにも凄惨だからか、報道規制が敷かれているようだ。

「これで四人目……か」

「こら、葵ちゃん！ さぼってるよ給料減らすわよ」

マスターのその一言で俺は慌てて顔を戻し、皿を洗い出す。

「はい、これ追加ね」

そう言っつて、マスターは大量の皿を流しの横に置いた。

「それにしても、最近は何物騒になつたわねえ」

手を動かしながら、

「そうですね」

と、相槌を打つ。

「被害者の子達、まだ子供でしょ？ 人生これからだつたのに、可哀想ねえ」

俺は手を止めて、マスターを見つめた。

「なあに？ 怖い顔しちゃって」

マスターは何も知らないのだ。

何も知らないならば、そういう感想が出るのは仕方が無いのかもしれない。

が、大体の事情を知っている俺からしてみれば、少年達が死んだのは因果応報。当然の報いだと思う。

つい先日、殺人現場で件の連続殺人犯に遭遇したが、虫も殺せない程気弱そうな男だった。あいつに会えば、例え事情を知らなくても、少年達がよほどのことをしたと想像出来るだろう。

「なんでもないっす」

俺は視線を戻し、皿洗いを再開した。

夏美なつみと出会つたのは今から三年前の夏だった。

高校を卒業した後、自動車整備工場に勤め始めて間も無い頃。入社してすぐに先輩達のパシリとして扱われていた僕は、彼らの昼食を買いに工場の近くの弁当屋に行った。彼女はその弁当屋で僕と同じく高校を卒業と同時に働き始めていた。夏美の第一印象は、顔は

可愛いけれど雰囲気は暗く、飾り気の無い地味な少女だった。でも、何故か妙に彼女のことを気になっていた。

その後も僕は度々弁当屋を訪れ、何度か夏美に話しかけようとしたが、結局勇気が出せず、弁当を購入するやりとり以外の会話をすることは出来なかった。

そんなある日。

僕が同期の一人に「弁当屋の女の子が気になっている」と言ったのが先輩達にばれ、無理矢理告白させられることとなった。

先輩達に半ば強引に弁当屋まで連行されていく。

裏口のある路地裏に入ると、

「俺達はここから隠れて見てるからな」

先輩達は路地裏への入り口の脇に身を潜める。

僕が困り顔でそわそわしていると、弁当屋の裏口が開いた。

思わず、あつと声が出る。

出てきたのは夏美だった。白い三角巾に白いエプロン。いつもの接客をしている時のスタイルのままだ。

先輩達は一体どうやって彼女を呼び出したのだろう。

なんて思っていると、

「ほら、とつとと告ってこいよ」

先輩の一人がにやにやと嫌らしい笑みを浮かべながら、僕の背中を押す。僕はバランスを崩し、よろけたままの姿勢で夏美の前に出た。我ながらすごく格好悪い。

夏美はそんな僕を見ると一瞬驚いたが、すぐに険しい目つきになった。

「あたしのことを呼んでいるっていうのはあなたですか？」

「は、はい……たぶん……そうですね、けど」

あからさまに警戒している夏美を前にしてたじろいでいると、先輩の一人が小声で「告白しろ」と急かしてくる。

こんな雰囲気の中告白したって絶対に成功するわけがないと思っ

「ごつごつの困ります。もうやめて下さい」

夏美はそう言い放ち、踵を返すと店の中に戻っていった。

辺りが静寂に包まれる。

だが、すぐに先輩の一人が吹き出し、

「こ、告白する前に振られてやんの！」

と、言うのと、他の先輩達も釣られるように笑い出す。

どうやら夏美には完全に嫌われてしまったようだ。僕はがっくりと頭を垂れた。

それから一ヶ月が経ったある日のことだった。

その日は休日だったけど特にやることなかったもので、本屋で雑誌を立ち読みしたり、ファーストフードで安いコーヒーを飲んだりして時間を潰した。

夕日が街を照らし、林立する建物がオレンジ色に染まる頃、やることがなくなつた僕は帰路につく。

商店街を抜けて、隣街との境に流れている川沿いの土手を歩いてみると、見知つた少女がその斜面に座っていた。

その少女　夏美は肩まで伸ばした茶色がかつた髪を風になびかせて、空を眺めていた。普段、弁当屋で白い三角巾にエプロンのイメージが強い彼女が、Tシャツにデニムといった普段着姿でこんなところにいるのがなんとも不思議な感じだった。

声をかけたい。

でも、告白に失敗してから、あまりにも気まずいので弁当屋には行ってなかった。彼女は僕のことなんてもう忘れてしまっているかもしれない。

だけど、これはチャンスだ。彼女と仲良くなるには、ここでなんとかするしかない。

「あの……」

勇気を出して声をかける。

すると、夏美はぎくりと肩を震わせて、きよろきよると周囲を見

回し、自分以外に誰もいないことを確認するとこちらに振り向いた。
「えっと……確か、前にあたしのことをお店の裏に呼び出した人、
ですよ？」

「どうやら僕のこととは覚えているようだ。」

「は、はい、そうです！ ……隣、いいですか？」

夏美は一瞬躊躇したが、無言で頷いた。

夏美の隣に腰掛けると、一緒になって空を眺める。沈みかけた夕
日が眩しいくらいに赤く光っていた。

「この間はごめんなさい。実はあれ、先輩達の命令で……」

この機会に少しでも悪い印象を払拭したい。

「あたしも頭ごなしにキツイこと言っでごめんなさい。あの時はち
よっと先輩とトラブルがあつてイライラしていたから……」

夏美は伏し目がちに言った。

「お互い、先輩で苦労しているみたいですね」

「ですね」

それから、僕は表面上では冷静を装いながらも、必死に頭を回転
させて、会話を膨らませた。普段、とても内気で無口な人間とは思
えない程口を動かす。僕の人生ではあまりしない使い方をしている
せいか、顎がみしみし鳴って痛い。

しばらく僕の話が無表情で聞いていた夏美が、

「ぶっ……」

突如、吹き出した。

「あ、あれ？ ここ、笑うところですか？」

「う、ごめんなさい。あなたの必死な感じがおかしくって、つい笑
ってしまいました」

「どうやら冷静を装うことは出来ていなかったらしい。」

「ちょっと格好悪かったけれど、おかげで良いものが見れた。それ
はまるで、野に咲く一輪の花のような笑顔。」

「君はそういう風に笑うんだね」

なんて僕が言うと、彼女は頬を赤らめて俯いてしまった。僕も臭

いこと言っちゃったなと恥ずかしくなる。それっきり会話が途切れて、お互い無言になってしまう。

だけど、夕日に照らされた彼女の横顔をただ眺めているだけでも、退屈しなかった。

「なつ……み」

空を見上げ、届くはずもない月に手を伸ばす。もう二度と戻れない、あの幸せだった日々を思いを馳せるかのように。

ここはビルの間にある路地裏だ。人が三人は並べる程の幅があるが、大通りからは外れているので街灯の明かりはまるで入ってこない。だから、辺りに血を撒き散らせて横たわっている肉塊を照らす光は、仄かな月明かりだけだった。

僕はその地面に置かれている肉塊と、赤黒く染まった己の手を呆然と見つめる。

「なんてことだ……。もう、三人も殺してしまった。僕はこんなにも残忍な人間だったのか？」

誰に言うでもなく、自問した。

いや、こいつらは人じゃない。人とは認めない。何故なら、僕の大事な夏美を死に追いやった罪人だからだ。残りの二人にも残酷な死をもって罪を償わせなければ。

だったら、このまま走り続けるしかない。

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！」

その雄叫びは、今の僕の姿に相応しい重低音。熊や獅子のような大型の獣の咆哮。深夜で人通りがなく、静まり返った周囲に響き渡った。

ひとしきり叫ぶと、僕の姿は人に戻っていた。頭を下げて再び肉塊を見下ろした時、

「へえ、また派手にやったもんだな」

背後 路地裏の入り口の方から声がする。

振り返ると、そこには一人の人間が立っていた。

この闇に溶け込むような黒いロングコートに身を包んだ、黒髪の男。逆行で表情は伺えないが、鋭い切れ長の目がナイフのようにきらりと光っていて、どこか挑発的な印象を受ける。

怖い……。

ただの人間など、今の僕ならば簡単にバラバラに出来るというのに、何故かへびに睨まれたカエルのように恐怖していた。

この、男性にしてはやや小柄で線の細い人間に一体何があると言うのだろう。

「君は一体……何者なんだ？」

僕の声は震えていた。

「……俺が誰かなんてどうでも良い。心配するな、別にこのことは誰にも言わないし、今は何もしない。だが……」

お前が人間でなくなったら、殺すがな。

そう言い残して、男は去っていった。

“アン・ドン・ジュアン”でのバイトを終えた俺は、店の奥にある畳三枚程の狭い荷物置き場に入る。エプロンを外して、簡素なハンガーラックにかかったハンガーにかけると、その横にかけてあったコートを取って羽織る。俺のお気に入りの細身の黒いロングコートだ。

荷物置き場を出ると、マスターがキッチンで明日の下ごしらえをしていた。

「お先に失礼します、お疲れ様です」

「お疲れ様でした。暗いから気をつけて帰ってね」

「ははは、大丈夫ですよ。女子供じゃないんだから……」

「うふふ、わからないわよ？ 葵ちゃんみたいな可愛い男の子が好きな変質者がいるかもしれないし……突然、こんなことされるかもしれないわよん」

そう言いながら、マスターは俺の尻を撫でてくる。あまりにも気持ち悪くて、全身に怖気が走った。

「ひ、ひいい！ そんなのいいですから！ それじゃあ失礼します！」

これ以上セクハラがエスカレートすることを回避するため、そそくさと店を出た。

「んもう、つれないわねっ」

店を出た時、タイミングを計っていたかのように携帯が鳴る。

ポケットから取り出すと、ディスプレイには“冬子”の文字。通話ボタンを押すと、携帯を耳に当てた。

「何かわかったのか？」

すると、電話の相手は呆れたように溜息を吐く。

『電話に出て、第一声がそれ？ せめて、“もしもし”くらい言いなさいよねっ』

「……悪い。それで、何かわかったのか？」

『……はあ、葵に期待したのが間違だったわ。それで、例の事件のことなんだけど……』

この電話の相手は“芥川冬子”あぐたがわとうしこ。以前、とある事件がきっかけで出会った、ちよっとした知り合いだ。情報収集能力に長けているから、何か調べ物が必要な時は手助けして貰っている。今、世間を騒がせている連続殺人犯の正体が“白井達也”しらいちたつやであるということや、その動機を知ることが出来たのもこいつのおかげだ。

『……太田夏美はやっぱり……』

冬子の話を聞き終わると、俺は全てを理解した。太田夏美は何故死んだのか……そして白井達也が少年達を殺す本当の理由を。

「なるほど、そういうことか」

『どういうことよ？ なんてこんな事件のことなんて知りたがるの』

よ？ 大体、いつもいつも変なことばかりわたしに調べさせて、一体何してるのよ？」

「ありがとうな、今度またランチ奢るから」

そう言つて、携帯を耳から離す。

『ちよつと、聞いているの？ ちゃんと説』

俺は有無を言わず、携帯を切った。

悪いな、こればかりは説明出来ないんだ、と心の中で謝る。

おそらく、今頃ヤツは最後の“復讐”をしているに違いない。

全てを終えた後、人に戻るならそれでいい。だが、それは多分無理だろう。ヤツはもう、人の心を失いかけている。

空を見上げた。そこにはあと数日程で満月になるであろう欠けた月が、ぼんやりと浮かんでいた。

最後のターゲットは簡単に見つかった。

他の仲間達がみな殺されているというのに、のんきに夜の街を歩いている。

早足でターゲットである少年の前に回り込むと、こちらに歩いてくるそいつに向かって歩き出した。

「 ってえなあ！」

僕と少年の肩が強く当たる。

すると思惑通り、少年は僕にからんできた。

「おい、てめえ！ 人にぶつかつておいて、謝罪もなしかよッ！？」

土下座して謝れ！」

「……………」

僕は目を合わせないようにして、沈黙を貫く。そんな様子を見て、気弱な良いカモだと思つたのだろう。下品な笑みを浮かべる少年。

「…………丁度良いや、色々あつてむしゃくしゃしてたんだ。ちよつとこつち来いよ！ おらッ！」

少年は僕の手首を乱暴に掴むと、力づくでひっぱっていく。

程無くして、細い路地裏に着いた。

そこは、月の光さえも届かない。例えば大声を上げたとしてもすぐそこに騒がしい歓楽街があるため、誰かの耳に入ることはないだろう。

彼らのような不良は、このような何をしても外に漏れない場所を熟知している。おかげで僕は楽に狩りを行なうことが出来るわけだが。

「金を出したら見逃すとか言わねえぞ？　でも、安心しろよ。好きにボコった後にサイフごと頂くからよ」

少年は醜悪な笑みを顔に貼り付けたまま、両手を重ねて指を鳴らす。

「君は……僕のことを覚えていないのか？」

「ああん？」

僕が呟くと、少年は顔をしかめる。

「なんだ、お前さん……ひょっとして、前にもサンドバッグになって頂いたことでもあるんですかねえ？　誠に申し訳ないんですが、当方、サンドバッグのみなさんのことなんて、いちいち記憶に留めてごぜいません。ぎゃははははッ！」

何が楽しいのか、少年はけたけたと笑い出す。

僕は深く溜息を吐くと、

「……結局、誰一人として、僕のことなんて覚えていなかった……。大事な夏美を自殺に追い込み、僕の幸せだった日々を地獄に変えたっていうのに……。人の人生を滅茶苦茶にしたっていうのにッ！」

「あん？　ナツミ？　知らない名前だなあ」

「貴様あああああアッ！」

僕は完全に切れていた。その怒りに呼応するかのようになり、闇がその濃さを増し、僕を包む。

「な、なんだあ！？」

闇の中で、僕の体が作り変えられていく。みしみしと音を立てて、

少年の両脚は赤黒く変色し、まるで軟体動物のようにぐにゃぐにゃなつた。

「た、たたたたたたすけ……」

少年は顔を涙と涎と鼻水でぐしゃぐしゃにして、股間を小便で濡らし、小刻みに体を震わせながらもうつ伏せになり、残った右腕を使って地面を懸命に這って逃げようとする。

そんな少年の努力をあざ笑うかのように、大股で少年の体をまたぎ、立ち塞がった。絶望感に苛まれ、真っ青になった少年の残った右腕を破壊する。

「あはははは！　なんて無様なんだ！　どうだい？　君達が夏美にしたことを少しでもわかってくれたかい？」

しかし、最早少年にその言葉を理解する程の知性は存在しなかった。

「あひつ！　あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ……！」

少年は涎を垂らし、壊れたように笑い出す。

あまりの恐怖ゆえにとうとう狂ってしまったのか、それとも痛みを和らげるために過剰に脳内麻薬が分泌されているのか　そのどちらかはわからない。でも、どんな形にせよ、少年に意識があることは喜ばしいことだった。何故なら、最期の最後まで、たつぷりと苦しんでくれるのだから。

このままこの光景を眺めているのも一興だけれど、放っておいたら死んでしまう。やはりいつもの殺害方法にこだわりたい。

右手で手刀を作る。すると、鋭く伸びた硬い爪が一本の幅広の刃のようになり、僕の右手はまるで刺すことに特化したインドの刀剣ジャマダハルのようになった。

左手で少年の首根っこを掴み、体が動かないように固定する。手刀を作った右手を弓を引くように振り上げた。

「死ねえええええええッ！」

勢い良く、少年の股の間に殺意を伴った手刀を突き刺す。僕の右手はそのまま肉と内蔵を破りながら、体内を突き進む。肋骨を砕き、

胸の皮を引き裂き、血液と脂肪に塗れた爪先が体外に出る。

「ぐおおおおおおおッ！」

僕は少年の体ごと右腕を持ち上げ、アスファルトの地面に思い切り叩きつけた。少年の頭は割れて、脳漿が飛び散る。

腕を引き抜く。すると、少年の体から止め処なく血が流れ出し、地面に真っ赤な血溜まりができあがる。

我ながら、暴力の限りをつくした。確認するまでもない。少年はもう絶命している。

「……これで全てが終わったよ、夏美」

僕は空を見上げた。暗黒の空に丸い穴が穿たれている。あともう少しで満月となるだろう。

全てが終わったはずだ。

でも、何故だろう。なんだか、まだ僕の中にある焦燥感のようなものが晴れていない。そう思うと、動悸が激しくなり、いてもたってもいらなくなる。

気づいたら、僕は叫んでいた。

まず、両手足をなんらかの方法で破壊する。そして、トドメは股間から胸にかけて何か鋭利な刃物を刺しこんだ後、地面に叩きつけていた。おそらく、これは白井達也の死んだ恋人、太田夏美に少年達がした仕打ちを再現しているのだろう。

今回の連続殺人事件の被害者は五人からなる不良グループのメンバーだった。彼らは暴行、恐喝、万引きなどを繰り返す典型的な非行集団だ。

そんな小悪党にすぎなかつた彼らは、ある晩、何を思ったのか帰宅途中の白井達也と太田夏美を誘拐した。

少年達は白井達也に暴行を加えて拘束。その後、白井達也の目の前で太田夏美の両手足を折り、輪姦した。犯行が終わると、二人を

残し、少年達はそのまま去っていった。

数日後、五人の少年達はあっさり警察に捕まった。少年達が犯行のことを周囲に言いふらしたため、足がついたのだ。尋問の際、動機を聞かれた少年の一人は『リア充っぽくてムカついたから』と答えた。

少年達にはまともな動機もなく、まったく同情の余地が見られなかった。だが、裁判の結果は無罪。何故なら、当時彼らは十五歳から十七歳の少年だったからだ。

結局、彼らは保護観察処分となったが、殆ど野放しの状態で、各々好き勝手に生活していた。

「……なんだかな」

わたしはパソコンのモニターに表示されている、自ら調べた情報を読み返すと、ぼつりと呟いた。

なんとなくわかっていた。今、世間を騒がせている連続殺人の犯人が白井達也であるということが。

でも、なんで葵はこのことをわたしに調べさせるのだろう。

わたしには人よりも優れた情報収集能力がある。だから、以前から葵はわたしにこういった類の調べものをさせるのだ。いつも気になって理由を尋ねるのだけど、その度にはぐらかされている。ちなみに、調べものの報酬は葵が働く喫茶店のランチという、労力にまったくそぐわないものだ。それなのに、何故、毎回葵の頼みを聞くのかと言うと……それはわたしにもよくわからない。

「一体、何やってるんだか……」

窓越しに夜空を見上げた。星一つ、雲一つ無い空に白く丸い月だけが孤独に浮かんでいた。

「今日は満月か……」

わたしは一人ごちた。

「ああ！」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ！」

「僕が、無関係な人間を殺すわけがない！」

「きつとこいつも夏美を苦しめた人間の一人なんだ！」

「だからこれは復讐なんだッ！」

その時。

バイクのエンジン音が耳に入る。

まるで、それはあらゆる獣の咆哮。刻一刻とここに近づいてくる。

その音が大きくなるに連れて、僕の鼓動も大きくなっていく。

「僕を食い殺しに来るとでも言うのか？」

「甲高いブレーキ音が鳴り、この路地裏の入り口に黒いバイクが停車する。」

「白井、達也……」

「バイクに跨っている人が僕の名を呼んだ。」

「いや、それは人ではない。」

「全身はこの闇夜よりもなお黒い、暗黒。その漆黒の皮膚はまるで爬虫類のようで硬く冷たそうだ。だが、生き物というよりロボットのような印象を受ける。何故なら頭部がフルフェイスのヘルメットのような仮面で覆われているからだ。」

「その怪人はバイクを降りると、こちらへゆっくりと向かってくる。」

「僕は直感していた。」

「以前、路地裏で遭遇した黒衣の男……。」

「おそらく、この怪人はあの男だ。」

「でも、以前のような恐怖心は芽生えず、冷静に見つめることが出来た。」

「「やっぱりな」」

「怪人は僕の足元にある死体を見て眩いた。」

？

俺はバイクに乗って、街中を走り回っていた。
時間が時間だけに他の車両は殆ど走っておらず、歩行者も見当たらない。

臭う。

闇の臭いがぶんぶんする。

獲物はすぐ近くだ。さらに感覚を研ぎ澄ませた。

狩人の俺には獲物の居場所を嗅ぎつける嗅覚のようなものが備わっている。以前、白井達也に遭遇したのも偶然ではなく必然だったのだ。もっとも、あの時はまだ俺の獲物ではなかったが。

その時、心臓が一度大きく鳴った。

ブレーキペダルを握って急停車し、周囲を見回す。近くのビルとビルの間隙にできた真つ暗な路地裏の奥……それはまるでスポットライトのような月明かりを浴びて、そこに佇んでいた。

体長は約三メートル。全身は毛むくじやらで、まるで毛糸のお化けのようだ。手先からはナイフのように鋭く、長くて頑丈そうな爪が生えていた。

「白井、達也……」

いや、おそらくこいつはすでに人間ではない。だから、これは白井達也ではなく、“かつて白井達也であったもの”と表現する方が適切なかもしれない。

バイクを降りると、ゆっくりと白井達也に近づいていく。

どうやら、細い通路の奥　白井達也が立っている辺りには広い空間ができてきているようだ。そんなことがわかるくらい接近すると、ヤツの足元に置かれている肉塊が目に入る。それは手足が破壊され、胸と股間に穴が開いていた。白井達也の体は返り血で所々赤い。間違いない、これはヤツがこさえた死体だ。

「　　やっばりな」

白井達也は五人の少年達への復讐を遂げた。にも関わらず、さらに無関係な人間を殺した。

もうそれは復讐などではない。白井達也は相手が誰であろうと、太田夏美と同じ目に合わせて殺すだけの殺人マシンへと変貌してしまっただのだ。

白井達也と対峙する。

「こうなることは、わかっていた」

俺がそう言うと、白井達也は首を傾げる。まだ、言語を理解出来る程度の知性は残っているらしい。しかし、それを失うのも時間の問題だろう。

約十メートル程距離を開けて、様子を伺う。

ヤツの体は以前会った時とは段違いだった。特に目立っている体毛や爪を抜かしても、四肢、胴、首の筋肉の発達具合が尋常ではなく、人とは大きくかけ離れている。おそらく、人間の常識は通用しないだろう。

だが、それでも俺はこういう化け物との戦闘には慣れている。対して、ヤツはせいぜいひ弱なガキを五人と、そこに転がっている哀れな犠牲者一人を一方向的に殺しただけに過ぎない。だからこちらの方が有利だ。

腰を軽く落とし、構える。

いつでも殺し合いに望める心構えをする。

すると、俺が発する殺気を感じ取ったのか、白井達也も身構えた。お互いの間にぴりぴりと緊張が走る。

「……………」

そんな緊張状態の中にあっても俺は心を平然と保ち、氷のような眼差しで相手を観察していた。

「があああああああああああああああああああああッ！
だが、素人である白井達也は、その緊張感に耐え切れなかったようだ。心に押し掛かる重圧を振り払うかのように叫ぶ。

「来るッ！」

白井達也は俺に襲い掛かってきた。その尋常じゃない脚力でコンクリートの地面を陥没させる程蹴ると、たった一步で距離を詰めてくる。身体能力は俺を遙かに超えているようだ。

「ちっ！」

横に飛んでかわす。先程まで自分がいた場所に目を向けると、ヤツが着地と同時に放った一撃によって、地面がえぐれていた。

俺は肝を冷やした。脚力だけじゃなく腕力も桁外れだ。もし、あの腕が繰り出す一撃をまともに喰らったら、再び立ち上がることは出来ないだろう。

「ごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

白井達也は飛び上がり、両腕を振りかぶった。そしてそれを着地と同時に叩きつけるように振り下ろす。

だが、俺は悠々とバックステップでそれを避けていた。

「があああああああああああああああああああッ！」
三度、白井達也は飛び掛ってくる。

身体能力は優れているのかもしれない。だが、ヤツには経験が足りなかった。ゆえに攻撃は単調で、大振りだ。だから簡単に先を読み、かわすことが出来る。

でも、このままかわし続けていてもヤツを倒すことは出来ない。かといって迂闊にヤツに近づくことも出来ない。

あの高速で振るわれる豪腕。威力も恐ろしいが、リーチが俺よりも圧倒的に長い。遠距離攻撃手段の無い俺がヤツにダメージを与えるには、長い腕をかくぐり、あの間合いの中に潜り込まなければならぬ。だがそれは、小型の竜巻に突っ込んでいくようなもの。

自殺行為だ。

「ふっ」

……自殺行為？

狩人になってから、常に奈落の上の綱渡り状態。幾度となく厳しい戦いを強いられてきた。でも一度だって背を向けたことは無い。

なら、今回だって渡りきってやる。

白井達也は俺の目の前に迫ってきた。右腕を振り上げると、爪を突き刺すように手刀を繰り出してくる。

俺はその腕を頭でU字を描くように潜り、ヤツの右側面に回りこんだ。

「シッ！」

左足を内側に回転させ、その勢いを腰、左腕に伝達する。肘を直角に曲げ、ハンマーで打ち抜くようにフックをヤツの脇腹にヒットさせた。

「ぎいひひひひひひッ！」

ヤツの防御力はそれ程高くないのか、パンチを食らうと体をくの字に曲げた。

「もういつ　！？」

追撃しようと思った矢先だった。ヤツは体勢を崩したまま、おもむろに腕を下段から上段にアップパーをするかのように振り上げる。

すぐさま後方に飛ぶ。

が、胸の装甲がかなり削られていた。素人の恐るべきところの一つは、稀に予測不能なトリッキーな動きをすることだ。普段、単調でわかりやすい動きばかりのくせに、突如予想外の攻撃を混ぜてくるのだ。

格闘技において、パンチやキックなどの打撃技を放つ際、必ず下半身に予備動作が見られる。それを見て、経験者は次の攻撃を予測するのだ。これは毎回視認してから動くというよりは、殆ど条件反射であると思われる。

だが、素人の攻撃にはそれが無く、純粹に腕力のみで技を繰り出す。それでも素人はパンチを打つ際に腕を弓なりに引くなどといった無駄なモーションがあるから、まずプロにその攻撃は当たらないのだが、今のようにはバランスを崩した状態で、経験者にはありえない。練習で体に刻み込まれた条件に当てはまらない動きをされると、例えプロでも一瞬困惑し、動けない。しかし、そういった攻撃にはキレが無いため、威力が無い。せいぜい目くらまし程度の効果しか無いだろう。

でもそれは、ただの人間にのみ当てはまることだ。この怪物の豪腕ならば、例えばバランスを崩した状態で、体重が乗らない腕力のみで頼った攻撃でも、相手に十分なダメージを与えるだろう。その証拠に銃弾をも弾く俺の装甲にくつきりと爪の痕が刻まれている。

「がああああああああああああああああああッ！」

そこからの白井達也はまるで暴風のようなだった。実際ヤツが腕を振ると風が起っている。

間髪入れず、がむしゃらに両腕を動かして、攻撃してくる。しかし、どれも見え見えで、避けるのは容易い。もしヤツに格闘技の経験があったら、こうはいかなかっただろうが。

「シッ！」

ヤツの攻撃の合間に素早くパンチを入れる。先程のような失態を犯さないように、深追いはしない。

「ぜはあ……ぜはあ……」

まったく休まず体を動かし続け、さらには俺の攻撃を何度もその身に浴びたから、ヤツの体力はかなり消耗していた。それでも流石というべきか、だいぶ動きが鈍くなっているが、それでも手を休めない。

「せいッ！」

俺は足を真っ直ぐ突き出し、前蹴りをヤツの鳩尾に食らわせる。

白井達也の巨体は後方に吹っ飛んだ。

「そろそろ、終わりにさせてもらっぜ」

俺は前傾姿勢を取り、右脚に力を集中する。

「……？」

白井達也はふらふらと立ち上がると、こちらに向かって両腕を突き出した。

嫌な予感がする。

あれは素人だが、殺人マシンだ。この殺し合いの最中に無駄なこととはしないだろう。下手をしたら、俺にとって致命的な事態に陥るかもしれない。

その時。

白井達也の両腕の体毛が、物凄い勢いでこちらに向かって伸びた。

「しまッ！」

予感は的中した。

しかし、気づくのが僅かに遅かったようだ。咄嗟に真横に飛んだが、体毛はヤツの意思通りに動くのか、途中で方向を変え、俺の体を捉えた。

体毛が俺の両手足に巻きつく。

「くっ」

あっという間に体を拘束されてしまった。

“ヤツら”はただひたすらに己が抱いた一つの欲求を満たすためだけの存在。白井達也は復讐をしたいという欲求のみを行動原理に持っている。今までの復讐対象者はヤツの従来のも身体能力だけで十分復讐を果たすことが出来た。だが、俺相手ではそれが叶わなかった。それゆえにヤツはこの短時間で進化したのだ。

なんとか逃れようともがくが、完全に固定されて、ぴくりとも動かない。この体毛は柔軟さを兼ね備えながらも恐ろしく丈夫だ。“切れ味の良い刃物でも断ち切ることは出来ない”だろう。

「これもガキ共の真似事かよッ！」

白井達也はそんな皮肉になど耳を貸さず、体毛を動かし、ゆっくりと俺の体を持ち上げた。

一体何を始めるつもりなんだ……？

何をするにしても、ろくなことじゃないことだけは確かだ。

徐々に空へと上がっていく。俺は体を大の字に固定されていて、白井達也と体毛で繋がっている。まるで、ヤツが風揚げをされていて俺がその風のようだ。

ビルの三、四階相当の高さまで上がった時、ようやくヤツの狙いを悟る。

「マズイッ！」

だが、気づいたところで身動きの取れない俺にはどうすることも

出来ない。

下から俺を見上げる白井達也の口角が、少し釣りあがったように見えた。

その瞬間。

俺の体は物凄い速さで落下した。

「がはッ！」

白井達也は体毛を鞭のように操り、俺を地面に叩きつけたのだ。コンクリートの地面に裂け目が生じる。全身がバラバラになるかのような激痛が走った。もし、俺が生身の人間だったら、本当に体がバラバラになって、間違いなく即死しているだろう。

「再び、空中へと上がっていく。」

先程と同じくらいの高さまで上がると、また地面に叩きつけられる。

「ぐッ……」

ダンプカーに跳ねられたかのような衝撃を体に受け、苦痛と呼吸困難に襲われた。あまりの苦しみに呻き声を上げる。

またしても、持ち上げられていく。

体が空に上がっていく時間が妙に長く感じる。その間中、何度も地面に叩きつけられる時のことを想像して、身がすくんだ。だが、命乞いなどしてやらない。

「ごはッ！」

何度も何度も叩きつけられる。

その度に地面が陥没し、蜘蛛の巣のような亀裂が走った。それと同じように体中の装甲が砕け、ひびが生える。

もう何度地面とキスしたことだろう。

体中の感覚があまり無い。目の前が白く霞んでおり、気を抜くと意識を手放してしまいそうだ。

俺が動かなくなると、体の戒めが解かれていく。

手足から完全に体毛が解けると、収縮し、元の長さに戻った。

白井達也が仰向けに寝かされた俺にゆっくりと近づいてくる。俺

を見下ろすと、不気味に顔を歪ませた。おそらく、これから手足を砕き、股間から爪を突き刺し、頭を割るといふ、いつもの儀式を始めるつもりだろう。

俺の左腕を掴もうと、手を伸ばしてくる。膝を折り、前傾姿勢で覆いかぶさってきた。

今まさに、俺の腕が掴まれるといった瞬間　白井達也はびくりと体を震わせると、動きを止める。

「……………」

ヤツは自分の脇腹を見下ろすと、不思議そうに首を傾げていた。どうやら理解出来ていないようだ。何故、自分の腹に“刃”が刺さっているのか。

俺は“右手の先から伸ばした刃”を引き抜く。すると、ヤツの腹からは生臭い血液が流れ出た。

「じぶッ」

白井達也は口から大量の血液を吐いた。両膝を地につけると、ゆっくりと体が傾いていく。

「ぐ……………」

俺は力を振り絞り、こちらに倒れかかってきそうだった白井達也の首筋に横から蹴りを入れた。ヤツはそのまま右側頭部から地面に突っ込む。

立ち上がり、白井達也を見下ろす。

俺には予想出来ていた。

動かなくなれば、白井達也は必ず、少年達に毎回律儀に行なっていた“復讐”を始めるだろうと。だから、俺はあえて動かなくなつたフリをしたのだ。案の定、ヤツは無防備に近づいてきた。完全に俺が動かなくなったものと信じ、隙だらけで覆いかぶさってきたのだ。だからその隙について、俺の“体中のどこからでも刃を出せる能力”を発動させ、ヤツの腹に突き刺したのだった。

「……………今度はこっちの番だ。白井、達也」

日が傾き、空が茜色に染まっている。遠く空の上を飛ぶカラス達
が、沈み行く夕日を惜しむかのようにカアカアと泣いていた。

その日は偶然にも二人の休日が重なったから、夏美のたつての希
望で少し遠出をして遊園地へ行つて来たのだ。

「いやあ、今日は疲れたね」

僕がそう言うと、夏美は口元に手を当てて、くすりと笑った。

「あれだけはしゃいだらね」

夏美が遊園地に行きたいと口にした時、僕は遊園地なんて子供っ
ぽいなと内心小馬鹿にしていた。どうせ、どれも子供騙しなんだろ
うとタカをくくっていた。ところが、蓋を開けてみるとまったくそ
んなことはなかったのだ。

まるで不思議な世界に迷い込んでしまったと錯覚するかのような
外観。客を引き込むストーリー性を持ったアトラクション。銃で敵
を撃つと点数が加算されていくゲームのようなアトラクション。ス
リル満点のジェットコースター。そして、トドメに幻想的で煌びや
かなパレードが、僕のハートを鷲掴みにしたのだった。

僕はあまりの面白さにまるで童心に帰ったかのようにはしゃぎ回
った。でも、大きなお友達のそんなテンションは傍から見たら異様
だったのか、周囲の人達はみな見てはいけないものを見てしまった
かのように目を逸らしていた。でも、僕はそんな周囲の目など気に
ならなかった。

肝心の夏美はというと、初めは顔を赤らめて他人のフリを決め込
んでいたが、途中から吹っ切れたのか、苦笑しながらも僕のノリに
ついてきてくれたのだった。

「まさか、遊園地があんなに楽しいものだとは思わなかったよ」

思えば、遊園地に行ったのは生まれて初めてだった。こんなに楽
しいことを知らなかったなんて、ちよつと損をしていた気分だ。

でも、大好きな夏美と一緒に行けたんだ。今までの人生のことを

考えると、それだけで物凄く幸せなんだよな。

「今度、また一緒に行こうね」

僕は何度も首を縦に振った。

商店街を抜けてしばらく歩くと、いつか夏美と共に夕日を眺めた土手に辿り着く。

付き合い始めてから二年。実はかねてから夏美に伝えたいと思っていたことがあった。ずっと言いそびれていたのだが、今日こそ伝えようと心に決めていたのだ。

「ちよつと、ここで休んでいかない？」

「……いいけど？」

二人は土手の斜面に腰を下ろす。

どちらからともなく、遠く、ビルの上に落ちていく夕日を眺める。

「ここって、前に二人で夕日を見た場所だよな」

「うん」

夏美は遠くを見るような目で言った。

「懐かしいな。あの頃は、まだたっちゃんと呼き合ってたんだよな」

「そうだね」

すると、夏美の表情に影が差す。

「実はあの時、色々あって真剣にお弁当屋を辞めようか悩んでいたの。でも、たっちゃんと話したおかげで、もうちよつとだけ頑張ろうって思えたんだ。だから、今でも働いてるの、たっちゃんのおかげなんだよ？」

「そうだったんだ」

化粧は薄く、アクセサリーなんてまったく身に付けていないけれど、夕日に照らされ、微笑するその姿はまるで御伽噺に出てくる妖精のように美しかった。

そんな美しいけれどどこか儂げな夏美は、ある日、ふっと僕の前から消えてしまうのではないか。

そう思うだけで、いてもたってもいられない程の焦燥感にかられ

る。だから、今すぐにも僕のいる場所に繋ぎ止めておかないと。

「本当に、たつちゃんにはいつも励まされてばかりだよ」

「そんな……僕こそ、夏美にはいつも元気を貰ってるよ」

「そう、なの？」

「うん……」

そこで会話が途切れた。

お互い照れているのか、それとも夕日のせいなのか、二人は顔を赤く染めて空を眺めていた。

言うなら、今しかない。

「あのさ」

二人はほぼ同時に沈黙を破る。

「そつちから先にどうぞ」

またしてもセリフがかぶった。その偶然の出来事に驚き、お互い目を見開いて見つめ合う。

「ぷぷぷ……あはははは！」

「ふふふふふ」

僕が思わず笑い出すと、釣られるように夏美も笑い出す。

「僕達、息がぴったりだね」

「そ、そうだね」

夏美は指で目尻に浮かんだ涙を拭う。

「……あのね、こうやって、ずっと一緒に居れたらいいなって、言いたかっただけなの」

そう言うつと、夏美は頬を赤らめる。その言葉を聞いた僕もゆでダコのように顔を真っ赤にした。とても付き合い始めてから二年経ち、さらに同棲してるとは思えない程の初々しさだ。

でも、そんな夏美の言葉は、煮え切らない僕の背中を押した。

「夏美、僕も君とずっと一緒にいられたらなって思う……」

「……うん」

「だから、結婚してほしい」

僕がそう言うつと、夏美は大きく目を開く。そして、その瞳からこ

ぼれた一筋の涙が頬を伝った。その雫は夕日を反射して、キラキラと輝き、宝石のようだ。

「……ふ、ふえええええん！」

夏美はせきを切ったように泣き出した。まるで幼子のように泣きじゃくる夏美を前にして、まずいことを言ってしまったのかと狼狽する。

「へ、変なこと言ってごめん！ 結婚なんて、まだ早かったのかな？ と、とにかく泣きやんでよ」

僕は夏美の頭に優しく手を乗せると、ゆっくりと撫でた。

「ふえ、ひつく……」

夏美の涙はまだ止まらないが、段々と落ち着いてくる。

「ごめん、変なこと言って……」

「ちがうの……そうじゃないの……」

「違うって、何が？」

「嬉しいの。……嬉しすぎて、思わず泣いちゃったの。ずっとたっちゃんと家族になりたいって思ってたから」

夏美が僕に抱きついてきた。そんな夏美を僕は壊れ物を扱うかのように抱きしめる。女の子特有の柔らかい感触が心地良い。

「よかった。僕と一緒にいるのが嫌なのかなって心配だったよ」

「そんなことあるわけないっ！ だって、あたしはたっちゃんのこと大好きだもん！」

夏美は声を荒げて言う。すると、自分で言うっておきながら恥ずかしくなったのか、夏美はさらに顔を赤らめた。

「……夏美」

「……たっちゃん」

僕と夏美はお互い見つめ合い……やがて唇を重ねる。二人の影が地面に伸びて、一つに繋がっていた。

唇で触れ合うだけの稚拙なキス。でも、今の二人にはそれで十分だった。十分にお互いの愛情を確かめ合えたから。

今日はおそらく僕の人生で最高の日だ。

世界で一番愛してる人と生まれて初めて遊園地へ行き、とても楽しかった。それ以上に夏美と本当の意味で結ばれたことが嬉しかった。今日程幸せだった日がかつて僕の人生であっただろうか。

僕達は手を繋いで帰路についた。

いつもなら他人の目を気にして、外で手を繋ぐことなんて絶対にしない。でも、今日だけは特別だった。さっき味わった幸せの余韻をもう少しだけ感じていたかったから……。

「何、今のカップル。超ウザくね?」

「うぜーうぜー!」

そんな風に露骨に嫌悪感を向けているゴロつきがいることなど、夢にも思わなかった。それだけ二人は幸せすぎて、周囲が見えていなかったのだ。

土手から住宅街に入った時だった。

物凄い勢いでやってきた車が僕達の横で急停車する。その車は大きめのバンだった。

「急に危ないな……!」

僕がそう呟くと同時に車のスライド式のドアが開き、勢いよく三人の男が飛び出してくる。その内の一人が夏美の手を強く掴んだ。

「きゃあああああッ!」

呆然とことの成り行きを見守っていた僕は、夏美の悲鳴で我に返る。

「いきなり何するんだ!」

夏美のもう一方の手を強く握り、自分の方へ引き寄せた。すると、残りの二人が背後に回り、僕を羽交い絞めにする。

「いやあッ! たっちゃん!」

夏美が無理矢理車に押し込まれていく。

「やめるッ! 夏美を返せ!」

僕は必死に抵抗した。両手をばたつかせ、自分を押さえつけている男達の顔に何度も拳を当てる。

「ちッ……ウザってえ!」

その時、首筋にひんやりとしたものが当たった。
バチツと何かが弾けるような音がすると同時に僕の体の力が抜ける。スタンガンだと気づいた時にはもう遅く、僕の意識は完全に途絶えた。

気がつくのと、仰向けに横たわっていた。

頭がぼんやりとして、思考がおぼつかない。

何かを忘れているような……。

なんだっけ……。

とても大事な、愛おしい、何か……。

「たっちゃん！」

誰かが叫ぶように自分のことを呼んだ時、意識がはっきりとした。すると、今まで忘れていた夏美の顔が頭に浮かぶ。

「夏美ッ！」

僕は慌てて上半身を起こす。

そこは知らない場所だった。

その部屋の壁は壁紙が剥がれ、コンクリートがむき出しになっている。床のタイルには亀裂が走っている。天井を支える何本かの柱は所々欠けていて、鉄筋が丸見えだ。ほぼ全ての窓ガラスが割れ、床にその欠片が散在していた。あちこち埃まみれで、人の手入れがまったく行き届いていない。どうやらここは朽ち果てた廃墟のようだった。

部屋の中央付近に一人の男がいて、その周囲を囲むように三人の男が立っている。そして、少し離れたところで夏美が一人の男に羽交い絞めにされていた。

「ようやくお目覚めかよ」

一人の男がそう言うのと、その男の周りにいた三人の男達がにやにやしながら僕に近づいてくる。

日本人には不自然な程真っ黒に焼けた肌。顔のいたるところにつけられたピアス。均等に染まっておらず、汚らしい金色の髪。

それらのせいで一見老けているように感じるが、近くで見ると、どの男もまだあどけなさが残る少年だった。

「こんなことをして、一体僕達をどうするつもりだ!？」

僕がそう叫ぶと、先程輪の中心にいた少年　おそらくリーダー格と思われる人物が嫌らしい笑みを浮かべる。

「どうって……おにーさん達に遊んで貰おうと思っただよ」

他の少年達がどつと笑いだす。

「なっ……ふざけるなッ!」

僕が怒りをあらわにして、リーダーの少年に掴みかかるようにと、

「おっと、それ以上こっちに近づくなよ?　大事な彼女がどうなっても良いのか?」

リーダーの少年は夏美の方に視線を向けた。僕も釣られるようにそちらを見る。

「ひっ……た、たっちゃん……」

夏美の首筋には鈍く光るナイフが当てられていた。

「夏美には手を出すな!」

「それは、おにーさんの心がけ次第だぜ?」

リーダーの少年は唇の端を吊り上げ、邪悪な笑みを浮かべる。

「……なんで、こんなことするんだ?」

「いやさあ、オレら彼女がいない非リア充だからさ、仲良くいちゃついているリア充のあんたら見てたらさあ、イラっときちゃってさあ」

「ついカツとなってやった、でも後悔はしていない!」

「ぎゃははははッ!」

僕の問いに、少年達が各々答えた。

「どうすれば、僕達を解放してくれるんだ?」

「そうだな……お兄さんが大人しく、オレ達と遊んでくれたら帰してやるよ」

遊ぶと言っが、和気あいあいとゲームなどに興じるとはとても思えない。おそらく、一方的に暴力を振るわれるのだろう。

「……わかった。その代わり、絶対に夏美には何もしないでくれ」
「はいはい」

本当は怖かった。

強気を装っているが、さっきから足の震えが止まらない。

今まで喧嘩もろくにしたことなかった。当然、暴力なんかにはまったく慣れていない。だから、僕にとっては想像を絶する痛みがこれから襲ってくるのだ。怖くて怖くて仕方が無かった。

それでも僕が苦しい思いをすることなんてどうでもいい。でも、自分よりも大事な存在　夏美が苦しむ姿だけは絶対に見たくなかった。

「じゃあ、リア充なおにーさんに遊んで貰って、オレ達もリア充気分を味わっちゃおうか」

「へーい」

リーダーの少年がそう言うと、僕を取り囲んでいた内の一人が殴りかかってくる。頬を殴られふらついた僕を他の少年が押さえつけた。

「たっちゃん！」

夏美が悲痛な面持ちで叫ぶ。

「サンドバッグだ！」

最後に残った少年がそう言うと、僕の腹を執拗に殴りつけてくる。
「ぐッ！」

膝がかくんと曲がる。苦しくて自分の力だけでは立っていられない。

「おら、しっかり立ってるよ！」

後ろから押えている少年が力づくで僕を立てせる。

「やめてッ！　離して！　たっちゃん！　たっちゃんんん！」

夏美が涙を流して叫ぶ。

「夏美……大人しくしているんだ。大丈夫だから……」

「で、でも……」

「そうそう、彼氏の言うことはちゃんと聞くもんだぜ？　なっつみ

ちゅわ〜ん」

夏美の首筋に突きつけられているナイフに力が込められる。

「いつ……」

すると、夏美の肌にじわりと血が滲む。

「やめるッ！ 夏美には手を出すな！」

「あんだ達が大人しくしてれば、なッ！」

そう言った少年が僕の腹に膝を入れる。僕の腰が曲がって頭が下がると、さらに他の少年に頬を殴られた。口の中が切れて血が流れ出る。

それから何度も顔面を殴られると、口の中で嫌な感触がした。どうやら奥歯が折れたらしい。

「げはッ！」

折れた奥歯を吐き出す。

「よっしや！ 歯ゲツト！」

「なにい！ オレも歯ゲツトしてえ！」

「悔しかったら、お前も歯ゲツトしてみろよ」

「こいつう〜。よーし、オレだつて〜」

殴られ、蹴られ、殴られ、蹴られ……。

少年達にされるがまま、僕は耐え続ける。

やがて立っていられなくなり、床に倒れこむ。すると、三人の少

年達は僕のことを交互に踏みつけた。

初めは結構痛かったけど、もう、殆ど何も感じない。

頭がぼうつとして、視界が白みがかつていく。

僕、死んじゃうのかな……。

なんて、思っていた時だった。

「もうやめてッ！ やめて下さい！ このままじゃたっちゃんが死んじゃうッ！ お願いです……なんでも、なんでもします！ だから、もうたっちゃんに暴力を振るわないでッ！」

夏美の悲痛な叫びが部屋中に木霊する。

でも、僕にはどこか遠くから聞こえてきたかのように感じた。

「おい、やめる」

リーダーの少年の一言で、他の少年達の動きはぴたりと止まった。リーダーは夏美の前まで歩み寄ると、

「今、なんでもするって言ったよね？」

「……言いました」

「なんでもするってことはあ、なにしてもいいってことだよなあ？」

「……」

「つまり、なつみちゅわんは、たっちゃんの代わりにオレ達と遊んでくれるってことだよなあ？」

「……は、はい」

夏美は離れている僕の目でもわかる程、震えていた。でも、目を見開き、しっかりと少年を睨みつけていた。

リーダーの少年はこちらに振り返ると、

「おい、お前ら。おにーさんを拘束しとけ」

「え……どうやってですか？」

「車に縄積んであっただろ？ それ持つて来い」

程無くして、下っ端の少年が持ってきた縄で僕は柱に拘束される。満身創痍の僕は抵抗など出来なかった。

リーダー以外の少年達に夏美が囲まれる。すると、先程までとはがらりと雰囲気が変わった。夏美を見る目が違う。全員、頬を赤らめ、発情した雄犬のように息を荒げていた。

「……よく見ると、結構可愛い顔してますね」

「そ、そうだな……」

「やっぱ、女だし……やっっちゃっていいんすよね？」

すると、リーダーの少年が、

「なつみちゅわんがいつて言ったから、いいんじゃないの」

なんとも投げやりに言う。

どうもこのリーダーの少年はどこか他の少年達とは違う。なんとなくか、温度差があるのだ。他の少年達はみなその容姿に見合った性格で、まるで動物のように本能だけで生きていると言わんばかり

にその思考は至って単純な気がする。しかし、リーダーの少年だけはよくわからない。先程のリンチにもまったく関わってこなかった。この場において、一体何を利益と捉えているのだろうか。

「でも……流石にこれはマズくないっすか？」

この中でも特に若い、下っ端が言う。

「ああん？ 今更何怖気づいてるんだよ。拉致っておにーさんと遊んじゃってる時点で十分マズいんだよ。頭悪いくせに余計な心配してんじゃねえ！」

「う……す、すみません……」

リーダーの罵声を浴びると、下っ端は縮み上がる。

この少年達は一見無秩序な荒くれ者の集まりだが、完全にリーダーが指揮系統を掌握している、統制のとれた集団だ。リーダーの意思は絶対で、他の少年達は決して逆らえない。

「暴れられたら厄介だ。先に手足潰しとけ」

リーダーがそう言うと、少年二人が夏美の両腕を押さえつける。

「いやあああああああッ！」

骨の折れる、不快な音が部屋に響く。あまりのえぐい音と感触に、さすがの少年達でも顔を引きつらせている。

でも、そんな中でただ一人だけとても楽しそうな人間がいた。

リーダーだ。リーダーは恍惚とした表情を浮かべていた。先程、僕が殴られている際は気づかなかったが、おそらく、この少年は今と同じような顔をしながら見ていたのだろう。他人の顔が苦痛に歪むのが大好きな根っからのサディスト。残忍で冷酷な悪魔のような人間。

夏美の泣き叫ぶ声が僕の耳に入ってくる。その度に、僕の心はずきりと痛む。でも、体の感覚が麻痺して動けない。悔しいけれど、どこか別世界のことのような気持ちで見つめていた。

「なっ……み……」

目の前には地獄の光景が広がっている。

夏美に覆いかぶさる四人の少年達。

そして、それを離れた場所から見て、笑っている少年。

残酷にも、僕の意識は回復していた。

夏美に群がる少年達は、まるで地獄に住まうという餓鬼のようだ。その餓鬼共に夏美が、僕の大好きな夏美が、目の前で苦痛を強いられ、貪られるように全てを奪い取られていく。

リーダーの少年が僕の方に視線を向けると、目を輝かせた。

「おい、見るよ。こいつ、勃起してるぜ！」

そう言われて初めて気づいた。

確かに僕の股間は痛々しいくらいに膨張し、ズボンを押し上げていた。

「自分の女が犯されてるのを見て勃起するなんて、こいつ変態じゃねえの？」

「ひよつとして、噂のネトラレ属性つてやつ？」

「それとも、こいつも混ざりたいんじゃないの？」

「えー、流石にもう無理だろ」

「あははは！ 残念でした。おにーさんはそこから見ててね」
悔しかった。

少年達への怒りと羞恥心がぐちゃぐちゃになっていた。

許せない。

絶対に許すことは出来ない。

憎い。

憎くて憎くて仕方が無い。

だから、こいつを殺さないと……。

？

気づいたら、僕の下腹部からは血が流れ出ていた。

ちよつと不思議だ。

僕はもうこんな化け物なのに、体の中にはまだ人と同じ赤い血が流れているんだな。

それにしても、目の前にいるこの人は、ずっと手ぶらだったはずだ。なのにこれはどういうことなんだろうか。さつきは無意識にやっていたけど、僕は体中に生えている毛を自由に動かすことが出来る。おそらく、この人の刃もそうだった類の能力なのかもしれない。そんなことを考えていると、目の前の怪人は僕に突き刺した黒い剣のような刃を上段から振り下ろしてくる。僕は咄嗟に頭を庇いながら後方に飛びのくが、左腕をざっくりと斬られた。傷口から勢い良く血が吹き出る。たぶん、動脈が切れたのだ。でも、一体なんでこの人は僕にこんな酷いことをしてくるんだろう。

僕はただ、夏美の仇を討ちたいだけなのに……。
下腹部と左腕が物凄く痛い。しかも傷口から止め処なく血が流れ出ているせいか、頭がくらくらし、まとも立っていられない。とうとう重力に逆らえず、両膝を地面につく。

怪人はそんな僕の側頭部に容赦無く回し蹴りを叩き込んだ。口の中に溜まっていた血液を吐き出しながら、地面に倒れこむ。

こんなの理不尽だ。

僕は何も悪いことなんてしていない。

なんで、この人はわかってくれないんだ！

「ボ……ボゴオバ……ガブウ！」

どうやらもう、僕の発声器官ではまともにも人語を操れないらしい。何度も僕の思いを言葉にしようとするが、上手く発音することが出来ない。

「……………」
そんな僕を怪人は、無言で見つめていた。 僕のことを待つて
くれているのか？

「……ボグハ、ダダ、ナツミノ、仇ヲ、ウチダイ、ダゲナノニツ！」
必死に腹の底から搾り出すようにして、ようやく僕の気持ちを言
葉に出来た。

僕は正しいことをしている。

悪魔のような少年達によって、何の罪も無い夏美の心と体は汚さ
れてしまった。それなのに、社会は悪童共に何の罰も与えなかった。

だから……、だから、僕が罰を与えてやるんだッ！

「……それは、嘘だろう」

しかし、怪人は僕のそんな思いをきっぱりと否定した。

「ナツミヲ、犯シテ、自殺ニ、追イコンダノハ、アイツラナンド！」

だから、復讐してやるんだッ！

そう言おうとしたが、もうこれ以上喋ることは出来なかった。声
を出そうとしても、もう唸ることしか出来ない。もう人間じゃない
僕が、少しでも喋れたのは奇跡だったんだ。

「太田夏美を死なせたのは、あのガキ共じゃないさ」

ふざけるなッ！

あいつらが僕の夏美を死に追いやったんだ！

何も知らないくせに、適当なことを言うな！

「がああああああああああああああああああああああああッ！」
僕は重症を負っている体に障るのもお構いなしに、絶叫した。

怪人はそんな僕をただじっと見つめている。

何故だろう。

表情は仮面に覆われていてまったくわからないはずなのに、その
視線にはひどく責められているように感じた。

気づいたら、体が震えていた。

そして、胸が妙な違和感で締め付けられている。

僕は初めてこの人と遭った時に感じた恐怖を再び味わっていた。

たぶん、この人の言葉が僕の心を捕らえて離さなかったから……。

「太田夏美を死なせたのは……お前だよ、白井達也」

あの忌まわしい事件から一年が経っていた。

最初の頃は事情聴取やら裁判やらで心休まる暇がなかったけれど、裁判に負けてからというもの、僕と夏美はなるべく他人と関わらないようにひっそりと生活していた。

あの日以来、夏美は感情を失っていた。以前は野に咲いたんぽぽのように微笑んでいたのに、今では眉一つ動かさない。言葉もろくに発しなくなつたし、いつもどこか虚ろな目をしている。きつと、あまりの出来事に心が壊れてしまったんだろう。

少年達に折られた四肢は完治せず、また、強姦されている最中に何度も頭を強打したため障害が残って、夏美はまともに体を動かせなくなった。そのため、外出することはおろか、食事や入浴すらも一人では出来ない。

夏美は一日中部屋の中にいて、窓際にぽつんと座って外を眺めていた。色々と喋りかけてはみるものの、まともな反応が返ってきた試しがない。これじゃあただの人形と同じだ。僕はそんな夏美を見ているのが辛くて仕方が無かった。

以前の夏美に戻って欲しくて、僕は必死に努力した。この辺りで一番評判の良い病院に通わせたし、夏美の症状のことも勉強した。家事は勿論のこと、一人で何も出来なくなつた夏美の世話も焼いた。生活費や治療費を稼ぐために一生懸命働いた。怪しいと知りつつもわらにもすぎる思いで新興宗教のようなものにも手を出した。

それでも、夏美は元に戻らなかつた。

こんなに努力しているのに、何故昔の夏美に戻ってくれないんだ。僕はもう限界だった。

ある日のことだ。

仕事を終えて帰宅すると、夏美が倒れていた。

「 なつ、み? 」

頭の中が真っ白になった。体から力が抜けて、持っていた鞆を落とす。

なんとか我に返ると、夏美に駆け寄る。

「夏美! 何があっただんだ? 」

そこで、気づく。

床には大量の薬の入れ物が散らばっていた。それは夏美が通っている病院で処方されていた睡眠薬のものだった。

「まさか、これ全部飲んで……? 」

おそらく、この大量の睡眠薬は、自殺するためにこつこつと貯めていたのだろう。

「そ、そうだ……きゅうきゅうしゃ……」

僕は震える指で電話を使い、救急車を呼んだ。

……でも、間に合わなかった。

夏美の意識は二度と戻らなかったのだ。

本当に間に合わなかったのか?

誰かが言った。

お前は夏美の最期の言葉を聞いたはずだ。

そんなことはない! 確かに僕が帰宅した時はすでに死んでいたんだ!

思い出せ。

嫌だ……。

思い出すんだ。あの日のことを……。

嫌だ……思い出したくない……。

向き合っただ。己が過ちと……。

あ

ッ！

すぐに救急車はきた。

夏美はやってきた救急隊員によって速やかに救急車に乗せられる。最後に僕も乗り込んだ。

病院へと搬送される間、救急隊員の手で夏美に蘇生術が施される。戻ってきてくれ……夏美ッ！」

僕は両手を額の前で組み、ただ祈り続けた。

「……………？」

その甲斐あつてか、程無くして、夏美が目を覚ます。

「夏美ッ！」

だが、夏美は虫の息だった。意識が朦朧としているようで、焦点が定かではない。

「夏美……どうして……？」

夏美の安否を気遣うよりも先に、そんな疑問を口にしていた。でも、理由など聞くまでもない。あの少年達の顔を思い浮かべた。僕の中にどす黒い怒りがこみ上げてくる。

しかし、次の夏美の言葉はそんな僕の考えとは違っていた。

「ごめんね……、たっちゃんの優しさに、耐えられなかった」

かすれた声でそう呟くと、夏美は静かに目を閉じた。

どういふことだ？

「なつみ……？」

“ たつちゃんの優しさに、耐えられなかった ”

「 なんだよ……意味がわからないよ……どういうことだよ……夏美……起きてよ夏美…… 」

僕は夏美の体を揺さぶる。だが、夏美はもう何の反応もしない。

「 意識レベル低下 」

「 どいてくださいッ! 」

僕は答えを得られないまま、夏美から無理矢理引き離される。

「 答えてくれよ! なつみいいいいいいいいッ! 」

息が続く限り、夏美の名前を叫び続けた。でも、二度と彼女が目を覚ますことはなかった。

僕の夏美への愛情は、あの事件以来、同情や罪悪感といった類のものへと変わった。

変わり果ててしまった夏美を見る度にあの時のことが鮮明に思い出される。その度に胸が引き裂かれる思いだった。

目の前にいながら夏美を救えなかった自分。大好きな人が陵辱されているのを目の当たりにして、欲情してしまった自分。そんな弱くて汚らわしい自分を許すことが出来なかった。

夏美はそんな僕の罪を映し出す鏡だったのだ。

そしてその罪を消そうと懸命にもがいていた。 夏美の気持ち

などおかまいなしに。

それこそが、僕の本当の罪だった。

その罪は夏美が死ぬことによって、永遠に償うことが叶わなくなった。そんな行き場のない後悔は怒りへと変換され、あの少年達に向けられたのだ。

わかっていた。

本当はわかっていたんだ。

夏美を精神的に追いつめたのは僕自身だって……!

でも、それを認めてしまうと、狂ってしまいそうだった!

誰かのせいになければ僕の心は保てなかったんだ！
だから仕方なかったんだ！

……だけど、結局は狂ってしまった。

僕の体は心に合わせて歪んでいき……僕は僕でなくなってしまったのだ。

「あああああああああああああああああッ！」

全てを思い出した僕は、叫んでいた。

それと共に僕に残ったわずかな人間性は失われていく。

もう……何も考えられない。

絶叫する白井達也を目の当たりにして悟る。ヤツは完全に人を捨てた。もう、躊躇う必要はない。

俺は膝を曲げて腰を落とし、前屈みになり、右脚に意識を集中させた。

白井達也はそんな俺を見て何かを察したのだろう。ふらつきながらも立ち上がると、腕をこちらに向け、体毛を伸ばしてきた。

だが、俺に何度も同じ手は通じない。

真横に飛び、それをかわす。体毛は直角に向きを変えて、いまだ地に足をつかない俺を追跡してくる。腕を捕らえられるといった瞬間　俺は着地すると同時にヤツに向かって跳躍した。

重力の影響を受けて落下し始めると、左足を折り、右足をヤツに向かつて突き出す。すると、俺の右足は無数の刃で瞬時に覆われた。白井達也はそんな俺を呆然と見上げている。自分の傷ついた体ではもはや避けることは出来ないと言わねばならぬ。自分の傷ついた体で

飛んだ時の勢いと、重力加速が合わさって、ハヤブサが急降下する時程の高速で落下していく。白井達也は身構え、迎え撃つ体勢を

とった。

二人の距離はあつと言う間に縮まっていく。

お互いの体が接触するといった瞬間、白井達也はタイミングを合わせて手刀を繰り出す。

「!?」

「ぐぶツ……」

白井達也の手刀は俺の頬をかすめ……、俺の右足はヤツの心臓部分をとらえて、刺し貫いていた。

左足で白井達也の肩を蹴って、右足を引き抜き離れると、右足から生えた刃が引っ込んだ。

白井達也は膝について、こちらを見た。俺もそれに応えるかのように視線を向ける。

下半身から徐々に、白井達也の体は闇夜に溶けるように黒く染まっっていく。

……やがて全身が闇色に変わると、白井達也の体は崩壊し、蒸発した。

皿を洗う。

相変わらず昼食時の“アン・ドン・ジュアン”は繁盛している。だから、俺もマスターも大忙しだ。

そんな中、来客を知らせる鈴が鳴る。

「おーっす！ 報酬、貰い受けに来たぞ！」

やってきたのは冬子だった。

冬子はカウンター席に我が物顔で腰を下ろすと、

「一番良いランチを頼む」

と、やたら偉そうに言う。

「マスター。Aランチ一つ」

「はああああ？ わたしは確かに“一番良いランチ”って言ったよね？ この店で一番値段の高いランチは？」

「……スペシャルランチだ」

「そう。じゃあそれお願いね」

「……仕方ない」

マスターに伝票を渡すと、皿洗いに戻る。

しばらくすると、客足が途絶えた。時計を見ると十四時。今日も無事昼を乗り切ったようだ。洗物もあらかた終わって手が空くと、冬子が話しかけてくる。

「警察は白井達也を重要参考人として指名手配しているみたいだね」それは当然だろう。何故なら、殺された五人の少年全員に対する、明確な動機を持っていたからだ。

「まあ、事件の背景を知っているわたし達にとっては今更ってカンジだけど。白井達也と少年達の繋がりを世間に公表することは難しかったからね」

白井達也を公式に指名手配するということは、未来ある少年達の前科を公にしてしまうことだ。それゆえに公開捜査に踏み切ることが躊躇われた。その結果捜査が遅れ、結局少年達は全員殺された。今回ばかりは、死んだ少年達は“不幸にも”未成年だったってことか。

「あと、まだ葵には言っていなかったけど、実は白井達也と太田夏美は二人共孤児で、天涯孤独の身みたいなの」それは初耳だ。

「だから、あの二人にはきつとお互いしかいなかったんだろうね。そんな大事な人が目の前で酷い目にあつたらって思うと、胸が引き裂かれたみたいに苦しくなるよ……」

冬子は手元のカップを眺めながら言った。

その気持ちは俺にもわかる。

俺にもかつて、そんな女がいたから……。

もし、白井達也が少年達に復讐を遂げた後、人に戻り、殺人をやめていたら、俺はあいつを殺さなかった。あの少年達はそれだけのことをしたと思うから……。でも、結局あいつは闇に心をとらわれ、無関係な人間をも殺してしまった。あのまま放っておいたら、あい

つはひたすら人間を殺し続けただろう。だから、やるしかなかったのだ。

「ねえ、白井達也は今どこにいるんだろうね？ わたしとしてはこのまま捕まらずに逃げ切つて欲しいんだけど。葵、あんた何か知ってるんじゃない？」

「さあな……」

あいつは今どこにいるんだろうな。

闇にとらわれた人間の肉体は、死ぬと闇となって消えてしまう。でも、その魂はどこへ行くのだろうか？

白井達也の最期を思い出す。

俺はトドメの一撃を放つ際に反撃を受けて、多少怪我を負うことは覚悟していた。だが、あいつは“あえて最期の一撃を外した”。きつと、あいつもわかっていたんだ……自分が間違っているってそれゆえに、あいつは俺の一撃を受け入れ、死ぬことを選んだ。

だから、あいつの罪は許されても良いはずだ。許されて、太田夏美と同じところへ行っても良いはずなんだ。それくらい世界は優しくても良いはずなんだ。

「もう、またそうやってはぐらかす！ そろそろ、あんたは何者で、何をしてるのか教えてくれないんじゃないの？」

「う……」

俺は嘘をついたり、誤魔化したりするのは正直苦手だ。だから、こういう時どうしたら良いのかわからない。

冬子につめ寄られ、窮地に立たされる。顔を引きつらせながらも必死に頭を回すが、上手い言い訳が思いつかない。

そんな時、店内に鈴の音が響く。俺にとってはまさに救いの音だった。

「あ、客が来たから行って来るな！」

俺は素早くメニューを取ると、そそくさと来店したばかりの客のところへ向かう。

「んもっっ！」

冬子は悔しそうに頬を膨らませ、地団駄を踏む。

「まあまあ、これ飲んで落ち着いて頂戴」

マスターはそう言つと、冬子の前にコーヒークップを置く。冬子は眉間にしわを寄せながら、カップに口をつけてコーヒーを飲む。すると、表情が緩んでいく。

「美味しい。やっぱりマスターのコーヒーは最高ですね」

「うふふ、おだてても何も出ないわよん」

そこで、冬子のはつとなつて手を叩く。

「あ、そういえば。前から気になつてたんですが、マスターってぶつちやけオカマですよね？」

「あら、随分ストレートに言つのね」

「違つんですか？」

「肉体は男で心は女だから、世間一般ではオカマって言つのかしらね」

推定身長約百九十センチの筋骨隆々な肉体をクネらせ、マスターは言つた。

「じゃあ、やっぱり、男の人が好きなんですか？」

「ふふふ……どうかしらね」

そう言つと、マスターは何故か俺の方を見た。冬子も釣られるようにこちらに視線を向ける。なんだか酷く寒気がした。

「やっぱり、マスターはホモってことか」

「冬子ちゃん、それは違つわよ。アタシは“ホモ”じゃなくて“ゲイ”なのよ。そのところ間違えないで頂戴」

冬子はホモとゲイの違いがよくわからなかつたのか、首を傾げた。

後悔の矛先 END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866x/>

月下の狩人

2011年10月28日05時10分発行